

トランスナショナル物語

ポスト・コロニアルの亡霊としてのヨン様、そしてオバタリアンの逆襲
(ロスアンゼルス便り)

ミアム・シルバーバーグ

はじめに

『アジア現代女性史』の発刊号に際して、この手紙をロスアンゼルスから寄せることができるのをも光栄に思う。『アジア現代女性史』はトランスナショナル・フェミニズムを学者、文化、歴史につなげるすばらしい例である。今回、私に任せられた「ロスアンゼルスからの手紙」の欄を利用して、このところ気になっている問題を提起したい。いわゆるヨン様現象についてである。

太平洋の両側の読者によく知られているであろうことを、ここで語るのは憚られるが念のために説明しておこう。日本のマスメディアによると、テレビドラマ「冬のソナタ」が日本の中年世代女性の間で中毒ともいえる人気である。なかでも、彼女たちはドラマの主演を演じる俳優ペ・ヨンジュン (Bea Youg Joon) に熱をあげている。彼女たちの熱の入れようは彼、ヨン様が家族と呼ぶ日本に来た際、空港に群がった女性の群衆を見ると一目瞭然だ。ドラマに出てきた場所を訪ねて輝くような大きな笑顔の彼のことを幻想できるという、ソウル行きの韓国ツアーも成田から定期的に出発している。その一方で「内地」では韓国ブームが盛んである。韓国語のクラスは満員、テレビのコマーシャルも韓国語、韓国ドラマや映画についての雑誌まである。「冬のソナタ」グッズ以外にも他の韓国ドラマ、映画、俳優についてのものもある。ガイドブックも数多く番組案内、ソウル案内、観光用韓国語案内など多様だ。

一体、何が起こっているのだろうか？この最も端的な質問以外に、トランスナショナル・ジェンダー史の観点から私はさらに三つの質問を提起したい。第一に、この「冬のソナタ」メディアブームのなかで、植民地主義はどのような位置を占めるのか？第二に、ヨン様熱と私の呼ぶところの日韓植民地エロティシズムとはどのような関係にあるのか？第三に、なぜヨン様は少女のように見えるのか？

オバタリアンの復讐

先鋭歴史家である金富子女史に第一の質問をしてみた。彼女は返答の代わりに、「ヨン様は日本の家族の救世主」(講座2005年4月)と題された信田さよ子の論文を送って来た。これは「冬のソナタ」にハマってしまった中高年女性を好意的に描写する洞察的な論文である。筆者はカウン

セリングの場から、若さを失っていく女性の失望や欲望をよく理解している。オバタリアンには若さや夢はない。オバタリアンとは中高年の妻や母を老けた、非性的な、誰にも欲されない存在、笑われる対象とするための名前である。

オバタリアンに全く責めるべきところがないわけではない。信田は彼女たちのヨン様熱がいかに関心主義的な権利の主張に基づいているかを詳細に吟味する。そして植民地主義者の意識にあるねじれた論理を明らかにする。つまり、オバタリアン達はヨン様に拒否される可能性がないので、おおっぴらに熱をあげられるというわけだ。被植民地人としてのヨン様は、彼女たちに挑戦することは出来ない。オバタリアン達は彼に守ってもらうという幻想を抱きながら、現実には自分の子供をコントロールするように彼をもコントロールする。ヨン様は女性的なので、彼女たちを攻撃することもない。性的な存在ではないので、彼女たちの夫も気にしない。加えて、被植民地人に対する優越感と罪の意識があるので、嫉妬することができない。

信田は私の第一の質問にも答えている。一体、何が起きているのか？彼女によれば、今日のオバタリアンには今までになかった威信、コミュニティー意識、そして技術への征服感があるという。自分と似たような数限りのない女性と常に連絡をとることで、自分の人生に意義と目的を見いだす。しかし彼女達の復讐には害はない。オバタリアンはメディアに笑われることを許しているし、家庭を壊すわけではないし、さらにヨン様現象は北朝鮮を悪魔化したい政府の役にも立ってしまっている。北は誘拐犯のいる悪い国で、南は「冬のソナタ」の国。在日韓国人の地位が向上した訳でもない。すべてよし、か。

だが、残りの三つの問題はどうか。信田はヨン様現象における植民地主義の遺産を指摘しているので、最初の問題に答えてくれたことになる。植民地主義者の被植民地人に対するエロティシズムについては、信田はマルグリット・デュラスの小説『愛人』を植民地者女性と被植民地者男性の恋愛の例として引き合いにだしている。確かにこの小説は、ヨーロッパ植民地主義にとって重要な人種と権力に基づいた性的関係を力強く例証している。(この主題については、私は人類学者アン・ストーラーの研究をお勧めする。)しかし、私は彼女の論じるアブ・グレイブ刑務所での変態性を『愛人』と同じカテゴリーに入れることはできないと思う。イラク人捕虜のおとしめ方がアメリカの権力と人種差別に基づく極端に歪んだエロティシズムの現れ方だとしても、女性兵は男性の代用として使われたと思うからだ。写真の中では男性が虐待を設定し、女性が男性の振りをしているように見える。さらに最近の裁判での証言によると、このカップルはイラク人の体を自分たちの性的遊戯の背景に使ったという。

最後に、少女としてのヨン様について。彼のソフトさは彼が無害であることを強調するものだが、それに加えて信田は彼のファン層が宝塚ファンと重なっていることを指摘している。同感である。とはいえ、カリスマ的な女性の男役というよりは、男の男役だと思いが。

しかし、ヨン様が他の理由で少女のように見えるとしたら？彼が本当に少女だったら？信田の論文では、新しい技とエネルギーを政治的目的に使うオパタリアンの復讐が想像されているが、私はそれとはまた違った復讐のことを考える。もしかしたらヨン様は、真実と正義を求めて姿を変えて現れた「慰安婦」なのでは？

ポスト・コロニアルの亡霊としてのヨン様：証言

これは歴史の証言者としての慰安婦の物語（怪談）である。彼女達のことを慰安婦と呼ぶ理由を説明しておこう。言葉は歴史を裏切る。暴力は決して慰安にはならない。さらに付け加えるなら女性特有の拷問を課せられた奴隷となった彼女達はまだ少女だった。この怪談は歴史ではない。裏切られた歴史の話である。私の話はただの怪談であり、怪談というのはほとんどの場合、話せないもの、恐ろしいものに関してのものである。ここではヨン様怪談と歌舞伎の四谷怪談を比較するスペースはないので、これだけ言っておくことにする。広大な白い空間と車に乗っている人々の静的なシーンで描かれる冬のソナタが歌舞伎の色彩とアクションとは程遠いように、その証言は地味である。その証言者は自らの話を語る意思と緊急性を持つトラウマを負ったサバイバーである。それはほかの誰も話すことのできない話であり、過去には話すことのできなかつた話である。なぜなら聞く人がいなかったから。

証言することは声を持つこと。例えば、映画「ナムムの家」で慰安婦のパク・トゥリさんが突然「べっぴんさん、大丈夫かい？」と発言する時、それはぞっとした感覚を与える。これは誰の声だろうか。確かに日本軍人の言葉だ。言葉はこの老女の心に深く刻み込まれている。それらはどこで話されたのだろうか。どのように話されたのだろうか。慰安婦の言葉は皮肉に聞こえたが、軍人の口から出たときも皮肉だったのだろうか。それとも軍人は同情していたのだろうか。私たちにはわからない。私たちにわかることは、たとえこの言葉が彼女に向けられたものではなかったとしても、パクさんが目撃した何かを証言しているということだ。わたしたちは（意識的であれ無意識的であれ）彼女が忘れたかた記憶をつかむために軍人の言葉を使っているということを推測できる。

モノログ（松井やよりさんの思い出に捧げる）

マフラーをしてめがねをかけて、赤褐色のかつらをかぶったヨン様のような人が彼女の物語を語るために舞台にのぼる。ヨン様は変装した慰安婦の亡霊なのだ。彼女はヨン様のような衣装を着ている。それはドレスのようなコートで、首に厚く巻きつけたマフラーの色はピンクだ。鮮やかな色が彼女の顔を縁取る。（ドラマの映像担当者がヨン様のスタイル戦略に時間をかけていることは明らかである。）マフラーとハイネックのセーターのかさばった感じの結果として、テレビドラマの中ではヨン様の頭は浮いているように見える。アメリカではヘテロセクシャルの男性はこのような色を身に付けない。そして誰もでっかい襟のセーターやこんなスカーフには絶対に近づきはしない。男らしさのジェンダー化には東京とソウルでどのような違いがあるのだろうか。オパタリアンは気づかない。彼女たちは韓国がいかに日本に似ているか、そして日本がかつていかに韓国のようにであったかにしか関心

がないのだ。(近代化理論の態度)

ヨン様に化けた亡霊＝慰安婦は慰安所で列をなす軍人の娘の世代全体に呪いをかける。ほかの証言の場合と同じように、彼女は自分自身とほかの人たちを代表して語る。オバタリアンは聞こうとしなかったために呪われるのだ。10年の間、慰安婦は発言をしてきた。はじめは一人で、それから小さなグループで、そしてアジア全体の元従軍慰安婦が女性国際戦犯法廷のために2000年12月に東京に集まった。オバタリアン世代の多くが耳を傾けなかった。なぜなら法廷での慰安婦の証言は日本のメディアではほぼまったく報道されなかったからだ。しかしほかにも機会があったのだ。テレビ番組もデモも、また最近では政府とメディアによる検閲に関するスキャンダルもあった。

呪いとは以下のとおりだ。オバタリアン女性はいつまでも思春期のままだと宣告される。彼女たちは大人の体を持っているが、心は少女のままであり続ける。彼女たちの意識は漫画のメンタリティのままであり続ける。12歳のころに読んだ少女フレンドの言葉とイメージで空想し続けるのだ。冬のソナタにはセックスはない。物思いに沈んだロマンスがあるだけ。彼女たちにはこれが愛なのである。

女性たちは「優しい」生活にとらわれ続ける。深みもアイロニーもなく、冬のソナタに関する本や参考書などのグッズに見つけられる意味以外に何の意味もない生活に。彼女たちは冬のソナタのなぞを一時間で解けることを約束する本(「冬のソナタのすべて」、「一時間で冬のソナタの謎が全部解ける」、「冬のソナタの愛がもっとわかる本」)などを消費する。彼女たちの参考書は彼女たちの子供たちに何年も読むようせきたててきた教科書やワークブックにあたるものとなる。これらは彼女たち自身の「心のノート」になる。「心のノート」は現在日本の学校で必修の道徳の教科書のタイトルだ。しかし勉強の繰り返しを終わらせる試験は絶対ないのである。

記憶

冬のソナタは記憶に関する物語として理解することができる。記憶をなくすことについて、再び手に入れることについて、そして埋め込むことについて。番組では、私たちのヒーローは彼の記憶が自らに戻ってくることを要求する。証言する慰安婦は日本国家が彼女の歴史を奪ったと宣言するが、日本は彼女の記憶を奪うことはできない。しかしオバタリアンは冬のソナタの生活や冬のソナタの外の記憶の問題を解釈することはできない。ちょうど彼女たちが、歴史家、宋連玉(韓国、大陸、日本における韓国人女性について研究)が最近述べた、このドラマは日本の歴史についてではなく戦後の韓国の社会変化についてのものだという理解できないように。かわりにピンクの霞のなかで、彼女たちは冬のソナタをもっとも慣習的なレベル、男性がほかの男性に女性を与える物語として経験し続ける。(フェミニストが研究し教えてきたように、歴史を通じて女性は男性から男性へ贈り物として与えられてきた。奴隷であれ慰安婦であれ。この習慣は近親相姦のタブーをとまなう。)オバタリアンはこの歴史をつかむことができない。彼女たちは、冬のソナタではヨン様と彼の恋人が

つかの間、自分たちが兄妹であると考え、ということを知っているだけである。彼女はこれを気にしないように思われる。彼女は2人の男性のどちらが女性を与え、どちらが女性を奪うかというよくあるお話にしか関心がない。ヨン様と彼のライバルは彼らの最愛の女性に関して、「彼女を返せ」や「彼女は返さない」という言葉を繰り返す。2人とも彼女に自分に従うように言う。子供時代の空想の世界にとらわれているオバタリアンは気にしない。彼女は王子様と彼の敵が彼女のために戦っているという考えが好きなのだ。

証言：抑圧されたものの回帰

ヨン様として現れた亡霊としての慰安婦は、抑圧されたものの再来である。言い換えれば、慰安婦の歴史は否定されてきたのだ。だから彼女は証言するためにヨン様の姿で戻ってきたのである。変装した慰安婦は彼女の証言の一部として性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷の証言を引用する。彼女は日本兵に「お前は朝鮮人の顔をしている」と言われ、刀で切りつけられ、レイプされたと言った慰安婦が一人だけではなかったことを記憶している。怪談は語り継がれる。すべての証言 (testimony) が目撃証言 (witnessing) というわけではない。しかし女性国際戦犯法廷での証言は目撃証言 (witnessing) だった。ヨン様—慰安婦はのろいが一世代の間続くことを保証する。もしくは慰安婦が一人でも生き残っている限り。慰安婦が一人もいなくなる日まで、慰安婦は耳を傾ける人に向かって証言者として真実を語り続ける。

以上によって私の質問は答えを得た。しかし私は再び考える。何が起きているのか。もし、最初の話にあったようにオバタリアンがそんなにも無害なら、なぜメディアはこんなにも心配するのか。これは雑誌を売るために単に女性を笑いものにしていただけなのか。オバタリアンが勉強している参考書は勉強することをジョークにしているということが認識されるべきだ。「心のノート」にはそんなユーモアがない。そこには違いがある。では、なにが起きているのか。フェミニストアーティストのパラ・クルーガーの言葉を借りれば「最後に誰が笑うのだろう？」。

これで私の物語とともに私のロスアンゼルス便りを終える。

新しいジャーナル発行おめでとうございます。

ミアム・シルバーバーグ